

川井真由先生は神奈川県から推薦を受けて、令和5年4月からJICA(国際協力機構)の青年海外協力隊の一員として、ザンビア共和国に派遣されています。

まゆ先生のザンビアうるるんにっき 23



“Jambo sana?” (ジャンボサーナ、“お元気ですか?” (コンゴのスワヒリ語) 停電が厳しさを増し、電気がある時間よりない時間が長くなった首都に住む川井です。(数日にわたる停電が続き、冷蔵庫がただの箱になりました。)

今回は、ザンビアの難民問題についてお話したいと思います。

アフリカの紛争と難民キャンプ



私は今、ザンビアで働いています。

外国人(私)が働くには政府の許可が必要で、ザンビアに着いてすぐにImmigration(入国管理局)へ行き、Employment Permit(労働許可書)の申請をしました。

そこで、名前、生年月日、国籍などを伝えたのですが、私の名前を聞いた職員が「あなたの名前、キャンプの名前みたいね。」と言いました。

その時は何を言われているのかわかりませんでした。その後、ザンビアの小学校5年生の社会の教科書を見た時、Mayukwayukwa(マユクワユクワ)という難民キャンプがあることを知りました。(私の名前はMayu Kawaiです。確かに似ています。)

「難民」とは、「人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいると迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々(UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)のHPより(<https://www.unhcr.org/jp/what-is-refugee>))」と定義されています。

世界には、様々な理由で身の危険にさらされ、生まれた国を離れなければならない人々たちがいます。

「難民」と聞くと、どこの国や地域を思い浮かべますか?

戦争が起こっている「ウクライナ」や「パレスチナ」は、ニュースでもよく取り上げられているので、有名かもしれません。また、神奈川県には大和定住促進支援センターがあった関係で、多くのインドシナ難民の方が海を渡って来ました。

では、ザンビアの難民問題は、どのような問題なのでしょう?

独立後、内戦やクーデターを経験していないザンビアは、アフリカ大陸の中でも、極めて安定した国のひとつです。

見方を変えると、アフリカ大陸では、内戦・隣国との紛争などにより、暮らしていた国を追われた人たちが数多く生まれています。例をあげると、1994年のルワンダの大虐殺では、3ヶ月で80~100万人が殺されたと言われる歴史的悲劇の裏で、多くの難民が生まれました。

UNHCRの統計によると、迫害、紛争、暴力、人権侵害などの理由で国内外に逃げざるを得ない人の数（難民および国内避難民の数）は年々増えており、2023年末の時点で、世界中に1億1730万人います。（<https://www.unhcr.org/refugee-statistics/>）

現在、ザンビアでは10万人を超える難民、亡命希望者、その他の避難民を受け入れています。

2024年7月末のデータを見ると、大半はコンゴ民主共和国から逃げてきた人です。その他にブルンジ、ソマリアなどの難民、アンゴラ、ルワンダなどの元難民がいます（<https://data.unhcr.org/en/country/zmb/761>）。

マクワユクワは、そんな彼らのためにつくられた場所です。

また、ザンビアには他にも、メハバ、マンタパラという難民キャンプがあります。

先日、北西部州のメハバを訪れる機会がありました。メハバは、首都ルサカから車で13時間、コッパーベルトと呼ばれる銅の生産が有名な地域を挟んだ先、アンゴラやコンゴとの国境付近にある難民キャンプです。

かつて協力隊の隊員が活動していたこの地域には、「難民」の住む「キャンプ」と、ザンビアに定住することを決めた「元難民」が住む「リセットメント（再定住地域）」と呼ばれる地域があります。

今回は、「難民」が多く暮らしているキャンプ地域を訪れ、難民の方や支援する人たちから直接お話を伺ってきました。

次回、次々回ではメハバで見てきたこと、聞いてきたことをお伝えしたいと思います

(2024.9.30 川井 真由)

